

木々高太郎全集

5

わが女学生時代の罪ほか

朝日新聞社

木々高太郎全集

5



わが女学生時代の罪 ほか

昭和46年2月25日 第1刷発行

著 者 木々高太郎

著作権者 林 峻一郎

装幀者 原 弘 (NDC)

発行者 朝日新聞社 角田秀雄

印刷所 図書印刷株式会社

発行所 朝 日 新 聞 社

© Shunichiro Hayashi 1971

東京 大阪 北九州 名古屋

0393-240085-0042

木々高太郎全集 5
目次

*長篇小説

わが女学生時代の罪……………7

タンポポの生えた土蔵……………156

千草の曲……………178

バラのトゲ……………197

オリムポスの山……………227

異安心……………255

細い眼の孫娘 285

悪い家系 305

銀の十字架 328

失踪 357

幻滅 379

作品解説 中島河太郎 407

木々高太郎全集 5

わが女学生時代の罪
ほか

わが女学生時代の罪^{じょがくせいじだいのつみ}

序曲 殺人現場

画家の死

安田司法主任は、その県に赴任しての、初めての事件であつたから、すこぶる興味があつた。

変死と聞いて、すぐ、これは他殺にしたいものだ、抜かりなく、疑いは執拗にやってみたいと、われ知らず考えていたとみえる。警察医にまかせ切らず、一緒に自分も出張したのは、そのためである。

広い家であつたが、家族は、ただ二人で、木村鉄造氏の未亡人、もう五十五、六歳にもなろうか、それに少し普通でない姪、それは女中代りに置いてやっている、その二人――

殺されたのは、死んだ鉄造氏の弟の、同じ姓の兼雄、三八歳で、離れの一室で死んでいた。

いつも木村家を診察をする、近所の老いた医師がついていた。

「どうにも、私だけでは困りますので、奥さんを説得して、変死のお届けをしました。――一酸化炭素の中毒かと思ひますが、それにしては、顔色はどっちかといえは青いです」

「青い？ 一酸化炭素では青くないのですか」

「まあ、そうです。あれはヘモグロビンに結びついて、その色が鮮紅色の筈ですから、――特に唇だの、口の中だのでは、赤いのがよく判る筈ですが……」

「それだけでは、きまりませんね」

警察医はそう口をはさんだ。職業的の威厳があるかのこ

とく、老医師の説明などは、気にもかけない態度を示しながら、ずかずかと室内に入って行った。

「ストーブを焚いていますね」

「そうです。弟がわざわざつけましたんです。そしていつもむんむんとやるのです。薄着をしていなければ、絵がかけないんだと申しまして……」

なるほど、五十号か、それ以上かと思われる大きな画布を前にして、死体はうしろむきに腕椅子にかけている。部屋はすっかりあけ放されて、もう温度はよほど下っていると思えた。安田司法主任は、念のため柱にかけてあった赤い筋の寒暖計を見た。

それは摂氏が目盛しくない寒暖計で、古いものである。

その目盛は摂氏十三度になっていた。

「この寒暖計は？」

「はあ——それはもう二十年も、同じところにあります——」

「では、あなたは、いつもこの寒暖計で温度を見るのですか。この摂氏で？」

「はあ、いつの間にか、この部屋では、そういたします」

「どのくらいまで温めていたのですか」

「さあ、見たには見たのですが、二十七、八度になってい

たかと思えます。とにかく、しめ切って、そのくらいの温度にして、いつも長い間かいていました」

司法主任は、かきかけてあった絵を見た。それは、美しい少女の絵で、素人眼でも、もう七分どおり完成しているのではないかと思われた。

「モデルもなしですか。写真からですか、この肖像は？」

「はい。いいえ、写真も何もございません」

「では、誰という特定の人の肖像ではなく、創作ですね」

「いえ。それがあなた、空な人物ではないのでございます。どうやら記憶を辿って、或るお嬢さんの肖像をかいていたのでございます」

しかし、司法主任は、深くも氣にとめなかった。絵は、架台にかけて、現にかきつつある、その肖像のほかに、十号か二十号のものが、二、三枚、壁にかけてある。

「これも、この人のかいたものですね」

「はあ、東京から持って来て、ここにかけたのが一つ、こちらに来てかきあげたのが二つでございます」

「かきあげたって——いずれも未完成ではないのですか。うすっちゃけて——まだ本式に絵具がつかってないようですね。——それに比較すると、この、今かいているのは、鮮やかで、新しい感じですね」

未亡人は、これにも、何か説明をしそうであつたが、司法主任は、警察医のすることに氣をとられてしまつて、上の空だつた。

「中毒は中毒だね——どうも少しおかしいが、身体も大分弱つてたらしいから、まあ炭酸ガス、それに、このストープは、どうもよろしくない。きつと不燃焼のガスがもれる——どうです、しょっちゅう燻いぶつていましたか」

「はあ、その煙の方はいつころ氣にしないで、やたら焚いているようでした。誰も、絵をかいているうちはやつて参りませんので……」

「発見のときは？」

「今朝少し寒かつたものですから、午前中はとじ籠つておりました。出て来なければ、お昼飯を届けによこしても、機嫌がよくないものですから、二時頃まで、放つておきました。なかなか出てまいりませんので、来てみると返事がありません。それで扉をあけて入つてみると、煙のような霧のような、むっとする熱さです。死んだように椅子に沈んでいますので、いきなりガラス戸や障子を全部あけ放しましたが、入つて来ただけでも氣持がわるい始末でした。絵かきなどというものは変つたものですから、そんな点は氣にもいたしません、とにかく、死んでいるのです。あ

わてで、先生をお呼びして、来ていただきましたわけでした」

「死体はいじつてありませんね」

「はい。先生が、椅子から起したり、手当をなさいました」

「そうですよ。わしは人工呼吸をやるうかと思いましたが、それにもおよばない、もうよほど前に死んでいたものとみえます——」

「絵筆を持つていて、おとしたらしい。突然に死んだのですね——どうです、安田さん。解剖にしてみますか。脳溢血はそのため否定するわけだが、——情況からみて、あなたの考えて必要とあらばやりますが……」

安田司法主任は、あてはずれだった。自分で来てみると、これは他殺と考える情況は一つもない。念のため、あとで、この画家の生活やその他の問題で、自殺とか他殺とか疑われる点があれば別として——。

「どうです。御家族の方は、自殺とか、そういうことは考えませんか」

「さあ——前から変りものではありませんでしたが、別に、そんな様子は考えません。それに、今度こちらへ参つたときは、是非いいの一枚かきあげてゆくのだと、元氣でござ

いましたし、それに仕事は順調にすすんでいる様子でしたし——前々からみると、今度は元氣でした。いつも憂鬱な、偏屈な人間でしたが……」

「それから、こちらへ来て、どなたかと交際していましたか、たずねて来た人とか——」

「いいえ、もう十日ほどになりますが、たずねて来る人なんて一人もございません。手紙も二、三通——ただ、散歩に出て、郵便局や、本屋や、それに、飲み屋には二、三度参っているようです。それにしても前々のときからみると、仕事に没頭している点は、今度の方がずっと熱心でございました」

未亡人としては、弟のことではあるが、死んだものは、今さらどうなるものでもない、ことを荒だてて新聞にでも出るのは困ると、考えていたのであろう。その話は、自殺をも疑ってはいないし、いわんや他殺をも疑っているようなところはない。

安田主任は考えた。解剖をして貰って、中毒死を確認しておく方がよいか、疑いのないものとして、検視をすませてしまった方がよいか。ところが決しかねた。それで不機嫌に黙っていたが、突然「君はどうだ。君はどう考える？」と警察医の方へむいた。

「解剖してもたいしたことはない。——ただし、司法主任が何か情況証拠から疑っていることがあれば別ですよ。調べるといふ点を調べましょう」

「じゃ、あとに残って、情況を聞こう、聞いた上で決定してもおそくはないと思う。——帰って検案書の草稿をつくっておいてくれたまえ」

警察医は、うなずいて始末をして出て行った。老医師もそれについて出て行った。

「奥さん、死体はどうするのです」

「はあ、とにかく、お許しがあれば、東京へ電報をうちます。弟の家内がいますので、東京で葬式もしなければならぬと思いますが……可哀想なことをいたしました」

さすがに、眼をしばたいて、「葬式のお金も工面しなければならんことでしょうに——」と、東京の弟の生活のことなどを考えているのであろう。ポツンとそんなことを言った。

「少し伺うことがありますよ」

「はあ、どうか、ではあちらの方で、お茶をいかがでしょうか」

姪が親類の人を呼びに行つて帰つて来たのであろう。鉄造氏の未亡人は、死体を寝かせてやるように小声で命じて

いる。「いや、死体はしばらくそのままにしておいて下さい。お話を伺ってから——部屋もそのまま、——巡査を一人ついているようにさせます」

司法主任は、本屋の八畳の座敷にうつって、さて、画家の最近の様子を詳しく聞き、今までの生活についても一応聴取した。

「——どうも、生活はよろしくありませんでした。子供も二人ありますのに、怠けると申しますか、洋画というものは商売にならぬのでございましょうか、しょっちゅう帰って来ては、死んだ主人の厄介になっておりました。二年ほど前に主人が死んでからは、遠慮があつてまいりませんでした。今度絵をかくと申してやつて来たのでございませう。

——はあ、宅は、東京の旦那様、それは木村久芳さんとおっしゃる、あの木村家の、先代からの恩顧をうけております。その久芳さんと申される方は、子爵家から婿養子に來なすつたお方で、実はその方の、結婚前のお嬢さんを、長いことうちでお預りしていたのでございました。あの、弟の死にまじした離れの半洋間のような室は、そのお嬢さんをおあずかりいたすにつきまして、旦那様がお金を下すつて建て増しをした部屋なのでございます」

「そのお嬢さんとおっしゃるのは？」

「木村りみ子様とおっしゃる——この県立女学校を出るまで、宅におりましたが、卒業なすつてから、東京へお引きとりになりました、今は、女子大学へ通つておいでなされるのでございます」

「では、あの絵は、そのお嬢さんですね」

「はあ、そうだと思います。何も見ないで、弟は一心に、あれをかくておりましたが、見てみますと、よく似ております」

「どうして、東京でかかないのです。お嬢さんの肖像なら、東京で、実物を見てかいた方がよさそうなものですがね」

「はい。——ところが、お嬢さんのお宅へは、弟は出入りをとめられておりましたばかりではなく、お嬢様とは絶交の状態でした」

「はて、なぜね？」

「いろいろわけがございました。それで、昔、ここでお嬢様の女学生時代の肖像をかかせていただいたので、それを思い出してかくのに、ここでなければかけないと思つて、来たのに違いありません。——あれ以来、弟もどうも、ますます変りものになつてしまつた——とも申せませ

ので……」

「そのわけを伺いたいですね。いや、これは司法上必要で聞くのですから、かくさんで述べて下さいよ」

ほんとうは、妻女もそのことは述べたくなかったのであるが、しかし、心の一方では、警察から聞かれたら致し方もないと観念もしていたのであろう。司法主任の鋭い質問をうけながら、申し述べたのである。

「――申し上げねばならぬのでございましょうか。東京の旦那様にもお嬢様にも、これを申し上げるのはすまないこととでございしますが――昔、お嬢様が十八、九歳の折に、ここで兼雄が肖像画をかかせていたでございましたとき、ことを起したのでございます。と申しますのは、死んだ良人も私も、同じ家に住んでおりながら、少しも、そんなふうには見えませんでした、お嬢様が、兼雄の胤を宿されたのでございました。はあ、ほんとにとんだことで――東京の旦那様がお怒りになったのも無理はございません。相手が兼雄だということは、お嬢さんの口からはじめて知ったのでございます。それも、お嬢様は、兼雄を愛しているわけでもなんでもございませぬ。兼雄がまだ経験のない娘さんを誘惑したのでございましょう。それで、旦那様と死んだ鉄造とで相談いたしました、お嬢さんを一年間大磯へかくま

いまして、身二つになさせますと同時に、兼雄には、お嬢さんの妊娠も知らさぬことにして、二人を引きはなしてしまったのでございます。そのお子さんは、東京の旦那様と奥様との間の子供として籍を入れました。それまで、旦那様と奥様との間には子供さんがございませぬでした。はい、もちろん、そのお嬢様という方は、旦那様が子爵家にいる間に、或る女にお手がついて、その女との間のお子様なのでございます。――そんなわけで、弟の兼雄は、今まで、自分の子供をお嬢様が生んでおられるなどということを知りなかつたと思います。鉄造は譜代の恩顧をうけました本家のために、そういたしました。このことを知っているのは、鉄造の死にましたあとは、私と、旦那様と奥様と、お嬢様を大磯で子供を生むまで見ました婆やと、それに当のお嬢様よりほかは存じない筈でございます」

「ほう。それは不思議な話です。すると兼雄という画家の方では、そのお嬢様を愛していたのですね。それにもかかわらず引きはなされたのですね」

「そのとおりでございます。何しろ当のお嬢様が、おなかに子供がいるのに、兼雄を大嫌いでございました。――なんと不思議ですが、事実そうで、ただ、兼雄の方では、今でも、そのお嬢様を好きだったのでございましょう。死

んだ兄にはきびしく申し付けられていましたので、兄の死ぬまでは、こちらへまいりまして、兼雄もそのことは一切ふれませんでした。が、今度はやって来て、その昔を思い出して、あんな絵をかいているのでございませう——」

「だが、ことを起したときも、兼雄という人は結婚していたのですね」

「さようでございます。それに年齢から申しまして、身分から申しまして、お嬢様とは、まるで似合った仲ではございません。二人も子供のある家内があり——それで、お嬢様の妊娠のことでも知りましたら、なんとも申せませんが、鉄造が引きはなしたときは、それも知らず、おとなしく出入り差しとめを承知しました。しかし、心のうちでは、お嬢様が忘れられなかつたのでございませうね」

「すると、自殺かも知れないとは考えられませんか」

「さあ——何しろ、それからあとは、絵もろくによいのが出来ず——今度突然やって参つて、昔お嬢様の住んでいなかったお部屋で、お嬢さんの絵をかき始めたのでございませうから——何か考えがあったのかも知れませんが」

司法主任は、あとで部屋を調べて、二、三通の手紙類を探し出したが、遺書らしいものは一つも見つかることは出

来なかった。おかしい因縁物語はあるが、まず過失の中毒死——であろうと考えるようになった。東京の木村久芳氏とその一家、何よりもお嬢さんの木村りみ子を調べてみると判ることもあるかも知らないとは考えたが、三年も四年も、東京の木村家とも、お嬢さんとも隔絶されていたとすると、そこには問題はあるまい。ただ、心のうちで、長くお嬢さんに対する恋情を忘れかねていたとは認められる。

「前にかいたという、そのお嬢さんの肖像というのは、どうしました？」

「それは東京の旦那様がお買いとりになって、とりあげてしまつてございます」

二、三通の手紙というのは、いずれも簡単なもので、差し出し人は富田銀二、住所も東京となつてゐる。文面は三通ともに「絵はうまくいっていますか。小生のは異常な靈感があり、今度おめにかかるときは、よほど進歩したとおっしゃられるだろうと思います。画布と絵具お受けとりのことと思います」というようなものである。

「この富田銀二というのは、御存知ですか」

「さあ、兼雄の友人か、絵のお弟子さんかと思ひます」

他殺を見抜いて、問題にしてみようとの初めの意気込み

はどこへやら、安田司法主任は、死体はそれぞれお手配をすすめて結構ですよ——と言いおいて帰って来たのが、落ちであった。警察署へかえってから、あと始末に時間がかかり、もう日もくれて午後六時——安田司法主任が自宅にかえろうとしているところへ、突然、私がたずねて行ったのである。

「君がこの県に赴任してると聞いたので来たんだよ」

私がいきなりそう言うのと「なんだ。津村君か。なんの用事でこの県へ来たのだ」と珍しそうな顔をしていた。

「探偵的物件だよ」

「え？ 探偵的？」

「うん。僕の病院の患者——つまり精神病患者と言ってもいい——それが五、六日前に、不意に失踪したのだ、自分で——それを探すのが目的さ」

「ほう。それで？」

「君の援助をもうけることになるかも知れんと思って、今着いて宿をとって——ここを襲ったわけさ。もう、君のいない時間かと思ったが、それによって君の自宅をつきとめるだけでもと思って、来たのさ」

「そうか。いやいつもならこの時間にはいないだろうが、今日は変死が一件あったのだ。——ちょうどいい。君の精

神病の知識を借りたい。変死するのは自殺か、他殺か、過失死か、とにかく、絵かきが一人死んだのだ」

「絵かき？——どこで？」

「木村という未亡人の家さ。その弟の、やはり木村という絵かきさんが、死んだのだ」

「木村兼雄ではないか」

私がそう言うのと安田はびっくりして眼を大きくした。

「どうして知ってる？——君の探しに来た人物か、それが？ そいつ精神病患者だったのか？」

「いやいや、そうではない。僕の探すのは女の患者だが——しかし、その木村兼雄という画家も探したいのだ」

「え？ 木村兼雄？ では、あれは過失中毒死ではないぞ。——おい津村君、話せよ。こちらも話すから」

安田司法主任は張りきって、私を署長室につれ込んだ。そして二人は夕食も食べずに、お互いの話で時のたつのを忘れた。

私が話した話は、美しい二十四歳の木村りみ子という患者が私の恩師大心池先生のクリニックに診察をうけにやって来て、私とその主治医を任されて入院加療中に、謎の失踪をした事件である。

私は詳しく話したので、たいへん時間がかかった。しか